

The Futaka Spirit

(現教だより第22号)

2年 体育科

単元名 「100キック (ひゃっきっく) ゲーム」 ~体づくり運動~

指導者 前場 裕平 先生

課題を達成したいという子どもたちの熱意が、積極的にボールを蹴る姿に表れていました。体育館にずらっと並んだダンボールを始め、教具の多様さ、豊富さに授業者の意気込みを感じました。子どもの目線で柔らかく語りかける授業者の姿が印象的でした。

【子どもの活動】

1 本時のめあてを確認する。



クラスみんなの達成目標を確認する

2 1回目のゲームを行う。



前時までの見方・考え方を生かして挑戦する

3 全体交流を行う。



モデリングを行い、新たな解決方法を共有する

4 2回目のゲームを行う。



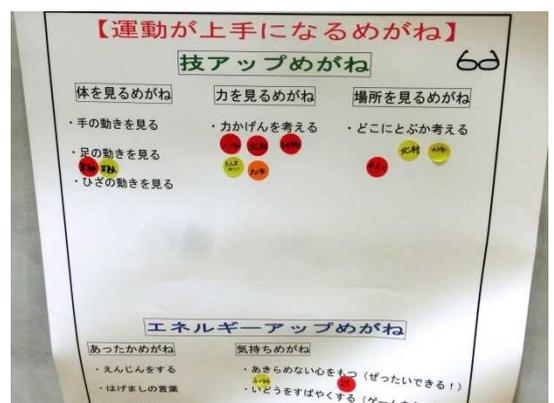
2回目のゲームで動きを修正していく

5 大学生の先生の映像を見る。



映像を見て、本時の学びを意味付ける

6 本時の振り返りを行う。



育んだ見方・考え方を自己評価する

(文責 橘 慎二郎)

【前場先生コメント】

記録達成型にしたものの、なかなか子どもたちのアドバイスといったところが見られませんでした。低学年での共感・協同がどんなものか。個人欲求が高い低学年の子どもたちが共感・協同する手立てを考えたいと思いました。「得意な子どもをじっと見ている姿」さえも共感・協同的な態度なのかな…。まだまだ整理できていません。また体育で一番配慮しないといけない「苦手な子どもの視点に立てていたのか」といった点がやはり不十分だった気がしています。2月に向けて、授業を見直していきたいです。ありがとうございました。

前場実践【第2学年 体育科】

～ 100キック(ひゃっきっく)ゲーム ～



本実践の主張点

自分に取って意味のある知を創造する見方・考え方を育むために

- I 世の中の事象において意味付くためのしかけを考える。
- II 4観点を意識した体育科のものさしを子どもと共に作り、自己評価に生かす。

世の中の事象において意味付けていくことについて

石井氏(2015)は、「これまでの教科学習では、多くの場合、単元や授業の導入部分で生活場面が用いられていても、そこから科学的概念への抽象化がなされたら、あとは抽象的な教科の世界の中だけで学習が進められ、もとの生活場面に戻ることはまれです。(中略)学習の集大成として単元末や学期の節目に『使える』レベルの課題を設定することも大切である。」と述べている。この指摘を受け、前場提案では、子どもが自分にとって意味のある知を生み出すようにするために、この単元で学習した入り口は自由に広く設定して子どもたちの自由な思いや発想で主体性を高め、単元が進む中で見方・考え方を焦点化していくことで学びの意味をもたせるという単元構成を設定している。そして単元の終末には育まれた見方・考え方をを用いて学びを自覚化し、自分にとって意味のある知につなげていくこととした。前場提案では、この「拡散-収束-拡散」というスタイルを単元構成に取り入れ、焦点化した見方・考え方をを用いて「拡散」していく場面を設定することで、子どもが「世の中の事象において意味付く」と表現している。世の中の事象というやや語弊があるが、要するに“渡り”に対する“戻り”，つまり演繹的な思考場面を取り入れるということである。

本時では、ボールを高く遠くまで蹴る方法を見付けるという課題に対し、子どもたちはそれまでの経験や見方・考え方を生かしながら、思い思いの方法で問題を解決しようとする姿が見られた。そして、全体交流や活動中の友達の姿から新たな視点を見付け、よりよい方法を見出そうとしてきた。これが「拡散-収束」に当たる。そして本時の終末において、単元を始めに子どもが感受するきっかけとなった大学生サッカー選手の映像を見せ、自分たちの見出した見方・考え方のよさを自覚化する場を設定することで、拡散的な思考を生みだそうとした。ただ、この活動によって子どもは拡散による収束に向かったように感じられた。実際、本時の振り返りにおいて、自分にとって意味のある知を見出そうとして子どもよりも、映像というモデリングによって共通理解されると、技能も関わる見方・考え方を記述した子どもは、映像と異なるようなことと考える。自分にとって意味のある知は教科の内容理解を超えた、その子なりの解釈であることから考えると、単元内で次々と見出されるものではなく、日常的な遊びの場面や生涯的な学びの中で、それまでに学んだ見方・考え方を無意識的に事象に当てはめていくことを通して少しずつ見えてくることではないだろうか。今回前場先生が単元レベルだけでなく、本時レベルで収束から拡散に抜ける授業を構想、展開して下さったことで、自分にとって意味のある知につながる見方・考え方の自覚化のための手立てについて改めて考えることができた。前場先生のチャレンジに感謝したい。

4観点を意識したものさしでの自己評価について

このところ、4観点を意識した自己評価についての提案が続いてきている。前場提案においても、ものさしを見方・考え方の一観点のみに限定するのではなく、運動が上手になる“めがね”として、大きく「①技アップめがね」(身体的・力動的・空間的な視点)と「②エネルギーアップめがね」(主体的態度に関わる視点)という2つの側面から設定している。毎時の終末に、子どもが実感した視点について自己評価することで、多様な観点での学びの実感を促そうとしたものである。ものさしを見方・考え方に限定するかどうかについては多様な考え方があっても、まずはものさしが子どもにとって真に有効なものとなっていく過程を大切にしたい。子どもがものさしのよさを実感したり、新たな視点を見出したりするのは、問題解決の過程において必要感が生じたときである。そう考えると、まずはこれまでに明らかになった、ものさしづくりの要件に立ち返り、感受した時に振り返りを書くことができる場面を設定したり、子どもの発言の根拠を問うたりすることで、子どもがものさしの内容を強化、修正できる状況を生み出していくことが大切である。そうした上で自己評価を重ねていくことを通して、子どもは学びを自分にとって意味のあるものとして捉え、新たな考えを生み出しているようになるのではないだろうか。

成果と課題

- 提案者の学習観、教科観、子ども観が明確であればあるほど、「何ができるようになるのか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」についての整理が具体的になる。論を補足するための引用、教材化、単元化の意図を示すことで論に説得力が出る。前場提案の論立てから学びたい。
- △ 学びを最後に振り返り、既にあるものさしに当てはめて考えるだけでなく、問題解決過程の感受場面を切り取ることで育まれる見方・考え方も大切にしたい。